

チャピウスそれともシャピユイ？

筆者は第33次日本南極地域観測隊の気水圏部門に参加し、1992年は1年間、昭和基地で過ごした。昭和基地では気象庁がドブソン分光光度計によりオゾン全量およびオゾンゾンデにより高度分布を測定している外、名大 STE 研の分光観測機器により気水圏部門が担当して成層圏オゾンの観測を行っている。この測定の実理については近藤・伊藤（1992）に詳しく書かれているのでそれを参照されたいが、一言で言うところまでチャピウス（Chappius）帯として知られている可視光領域でのオゾンの吸収の太陽天頂角の違いを用いている。1992年10月4日にはオゾン全量がおよそ140 DU（ドブソン単位）と通常の半分以下の観測史上最低値を記録した。

10月になると屋外での活動も活発になり顔の日焼けが進む。昨年の日焼けは越冬経験者の間で「10月にこんなによく日焼けしたものだらうか」と話題にのぼったくらい皆、よく日焼けした。そして、矢張りオゾンが減少しているからではないかと噂したものであった。そんなこともあり、成層圏オゾンの研究を行っているわけでもないがオゾン問題に関心を持たざるをえず、帰国後の今年には島崎達夫著「成層圏オゾン」を種本として、大学院教育学研究科理科専修で講義をしている。

さて、先のチャピウス帯の吸収の話をした後、小川利紘著「大気の物理化学」をも見る機会があった。この本の5章の5.1にはオゾン層の発見として、第1行目にシャピユイ（J. Chappuis）の名が記されている。日本語の発音ではチャピウスとシャピユイはかなり違うがローマ字の綴では i と u が入れ替わっているだけである。この二人は研究の対象から考えても同一人物であると断言していいであろう。これまで、チャピウスと信じていただけに、少なからず驚きであった。それではどちらが正しいのであろうか？これまでの本（桜庭・小河原（1957）、永田・等松（1973）、鈴木（1979）、島崎（1989））では読み方は別として Chappius と綴られている。

気象研究ノート第175号（1992）にはオゾン研究の展望と題して第1章に関口理郎氏がオゾン研究の歴史的

経過を述べており、図1.1には松野・島崎（1981）（島崎（1989）の図5とほぼ同じ）の著書より引用して、チャピウス帯吸収と片仮名で書かれている。

小川氏の本には、はっきりと「発見者の名前にちなんでシャピユイ帯とよんでいる」と記されている。氏は特に、これまでチャピウス（Chappius）と書かれていたのは誤りであり、シャピユイが正しいとの見解は述べていないが、本文及び巻末のオリジナル文献引用から、シャピユイが正しいように筆者には思われる。ただ、手元にはチャピウスあるいはシャピユイなる人物についての文献がなく、実証はできていない。なお、山本（1956）の本では Chappuis 帯と記されている。

固有名詞は正しく綴る必要があり、不可能に近いとしてもできるだけ、原音に近く発音できる仮名表記することが望ましいと思う。もし、シャピユイ（Chappuis）が正しいのなら、今後チャピウス（Chappius）帯から、シャピユイ（Chappuis）帯に変更すべきではないかと思ひ投稿した次第である。

何時ごろから u と i が入れ替わって誤記されるようになったのであろうか？識者のご意見を伺いたい。

（信州大学教育学部 岩井邦中）

参考文献

- 近藤豊・伊藤洋，1992：太陽可視光測定による成層圏オゾン及び NO₂ 観測法，第2回大気化学シンポジウム講演集 名古屋大学太陽地球環境研究所 88-103。
 松野太郎・島崎達夫，1981：成層圏と中間圏の大気，東京大学出版会，18。
 永田武・等松隆夫，1973：超高層大気の物理学，裳華房，138。
 小川利紘，1991：大気の物理化学，東京堂出版，139-140。
 桜庭信一・小河原正巳，1957：気象学図表及公式，地人書館，106。
 島崎達夫，1989：成層圏オゾン第2版，東京大学出版会，17。
 鈴木信 編，1979：大気の光化学，東京大学出版会，27。
 関口理郎，1992：オゾン研究の歴史的経過，気象研究ノート第175号，日本気象学会，2。
 山本義一，1956：気象輻射学，地人書館，60。